Osaka University Knowledge Archive

Title	難民のモビリティ・秩序化・日々のアナキズム　――人道主義的統治における南スーダン難民の社会生活
Author(s)	村橋, 勲
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72466
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　村　橋　　勲　　）	
論文題名	難民のモビリティ・秩序化・日々のアナキズム 人道主義的統治における南スーダン難民の社会生活

論文内容の要旨

本論は、はじめに、序章および終章をのぞく６つの章で構成される。各章では、南スーダン難民の移動性、難民の移動を管理し秩序化するテクノロジー、人道主義的統治の下での難民の応答と日常的実践という主題にそって、移動を切り口に南スーダン人の場所と文化を捉えること、そして人道支援的統治の下で展開される難民の社会生活から難民キャンプという空間について考察した。

序章では、難民の歴史と難民の人類学的研究に関する先行研究を概観した。そのうえで、本論における難民の定義と、これまでの難民の人類学研究を振り返りながら本論の視座を提示した。本論の視座は、難民のモビリティ、難民キャンプという空間と使用されるテクノロジー、難民の場所と文化を振りかえった。

第１章では、ヨーロッパとアラブとの邂逅から2005年の内戦終結までの南部スーダンの歴史を整理しながら、南スーダン-ウガンダ国境地帯の形成について論じた。この国境地帯は、透過性が高い国境であり、奴隷交易、労働人口の移動、難民移動といった形で人々が日常的に国境を越えており、そのために人口の流動性が高い社会が形成されてきたと論じた。

第２章では、内戦終結後の南部／南スーダンの国家建設と平和構築に注目して、分離独立を経て、新たな内戦に至る社会的背景とプロセス、そして難民移動を明らかにした。ここでは、１）内戦終結後の南部スーダン政府の統治構造が地域社会にもたらした影響と現在の内戦との関係、２）国家紛争主体と非国家紛主体の紛争アクターが関わることで生じる内戦の細分化、３）難民移動のパターンとプロセス、そして個別の難民の経験から難民移動にみる行為主体性と主導性を論じた。

第３章では、ウガンダの難民居住地における人道主義的統治について論じた。難民の移動、難民のケアと管理がどのようなテクノロジーによって行われているか、そして公式と非公式の統治メカニズムが共存に関する事例検証を行った。UNHCRとウガンダ政府による公的な管理――難民登録と、ケア――土地の割り当てと食糧援助は、しばしば非合法の統治のメカニズムに置き換えられる。そのなかで、難民は当局の支配を撹乱し、リスクを回避する方法――実践としてアナキズム――を即興的に生み出して応答していると論じた。

第４章では、NGOによる自立支援の事例を通して、レジリエンス人道主義と呼ばれるアプローチが難民の生計や社会生活にどのような影響を及ぼすかをNGOの所得創出活動支援に関する事例研究を通して考察する。ここでは、自立支援プログラムが想定するレジリエンスの意味を問うと同時に、自立を促進していないという実態を指摘した。

第５章では、難民の生計活動から個人や世帯レベルにおける難民の戦略を分析する。１）生計追求に関する難民の権利、２）農村居住地の環境および難民の生計を形作る制度的環境、３）ジェンダー化される難民の生計活動、４）難民と「ホスト社会」との社会経済的な関係について個人や世帯の活動に関する事例をあげながら考察した。

第６章では、難民が文化的実践をとおして家／故郷をどのように想像上かつ物質的に創造するかを論じる。難民の人類学においては、文化を固定した場所にあるという想定が批判されてきた。ここでは、南スーダン難民がウガンダとケニアの難民キャンプで行う文化的実践を通して、難民がモノと身体を介して場所を作り上げ、歴史と文化を再構築していると論じた。

終章では、１）自発的／非自発的な移動性／不動性という概念を用いて、紛争下での南スーダン人の移動を包括的に論じた。そして、文化を場所に固定する定住主義への批判は妥当であるが、人々が避難先で家／故郷を想像上かつ物理的に構築していることを見通すべきではないと論じた。難民キャンプに関しては、難民キャンプは、「剥き出しの生」しか存在しないような完全に非人間的な空間ではないが、諸アクターの戦術、期待、願望が複雑に交差する場であり、それによって難民キャンプは絶えず意図しない結果を生み出す不確実な世界が生み出される空間である、と結論づけた。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（村橋　勲）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
主 査	教授	栗本　英世
副 査	教授	中川　敏
副 査	教授	白川　千尋
副 査	准教授	森田　敦郎

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文「難民のモビリティ・秩序化・日々のアナキズム――人道主義的統治における南スーダン難民の社会生活」は、人類学的な難民研究に新たな展開をもたらす優れた論文である。本学位論文では、内戦や政情の不安定さのゆえに母国を逃れて難民となった南スーダン人を、ウガンダの難民定住地やケニアの難民キャンプで調査した、丸5年間にわたる長期のフィールドワークの成果と、人類学だけでなく、政治学、歴史学、難民研究等関連する学問分野の文献を広汎に渉猟し批判的に読みこんだ文献研究の成果が、バランスよく結合されている。

本学位論文が学術的に優れている点は、以下の3点に要約できる。第一に、本学位論文の序章は、近現代の世界における難民という存在、およびそれに対する研究の、日本語で書かれたものとしては最も包括的で批判的なレヴューであり、難民と難民研究に関心のある者にとって有益な論考になっている。参照・引用されている文献は、人類学はもちろんのこと、政治学、国際法、歴史学から難民研究に及んでおり、またスーダンと南スーダンだけでなく世界各地の状況が参照されており、包括的である。第二に、「難民レジーム」および「人道主義的統治」という分析概念を用いて、難民定住地や難民キャンプという難民が居住する空間が形成される動態的な力学を考察している点に、ステレオタイプ的で平板な難民理解を覆す、学術的な意義がある（第2章、第3章、第6章）。難民が居住する空間は、国連機関と受け入れ国政府が上から管理しようとする力と、それを一方では受容しつつ他方では抵抗して、自分たちの第二の故郷を創造しようとする難民たち自身の下からの力のせめぎあいとからまりあいのなかで生成していることが説得的に明らかにされている。第三の優れた点は、第二の点と関連するが、難民たちの生計維持活動が、フィールドワークの成果に基づいて、きわめて実証的に、生き生きと記述、分析されていることにある（第4章、第5章）。人道援助が難民の生活を支えているのは、もちろんのことである。しかし、配給される食糧や物資の量と質は、つねに不十分である。難民は、畑を耕したり、小商いをしたり、母国や第三国に定住した親類縁者からの送金に頼ったり、ときには援助する側を欺いたりして、多様な生存戦略に基づいて生計を維持している。こうした実態が、畑の面積や作物の収穫高、商売の現金収入に関する豊かな定量的データに基づいて考察されている。また、こうした生計維持活動を背後で支えている難民相互の社会関係や共同性についても、十分な目配りがなされ、分析の視角に含まれている。本論文のこの部分は、経済人類学の優れたモノグラフとしても読むことができる。

マスメディアにおける報道では、難民は依然として人道援助の対象である無力で主体性を欠く人びととして提示されている。本学位論文は、そうしたイメージはきわめて一面的でステレオタイプ的なものにすぎないことを、あらためて主張している。難民を対象として長期間のフィールドワークを実施することは物理的にも精神的にも容易なことではない。本学位論文としてまとめることになる調査研究を遂行できたことは、申請者が研究者として必要なコミュニケーション能力や交渉能力、そして他者に共感する力を十分に備えていることを意味している。

以上の理由から、本博士学位申請論文は、博士（人間科学）の授与にふさわしい学術的水準に十分に達していると判断した。